

堀内さんと愉しむ四字熟語 第6回 「走馬看花」 そうばかんか



馬を走らせて長安中の花を見る

花といえば日本では桜ですが、中国では梅、牡丹、蓮、菊それに蘭もあって、梅と牡丹が人気ですが、

No. 1 は選べないようです。一つである必要はなく四季に1点ずつというのもいいですね。

馬を走らせながら花を看るのが「走馬看花」です。科挙の試験が秋にあって春に発表されます。超難関に通った心躍る気分で馬を走らせ、長安の街中の花を一日で見てまわったという晴れやかな実景として孟郊の詩に詠われています。

春風得意馬蹄疾 一日看盡長安花

(『孟東野集「登科後」』から)

日本ではサクラサクといった気分で、それが後世になると高揚する心境での「走馬看花」の姿を離れて、事物の観察が粗略であることに用いられるようになります。そこで仔細に観察する意味での「下馬看花」が登場します。こうなるともう孟郊が馬を走らせて見た花の実景にはもどれません。ことばが時とともに移りゆく例といえるでしょう。

いまや観光バスに詰め込まれて移動しながら風物はちょっと見ですませるパック旅行にも使われています。現代の四字熟語は「走バ看花」です。高速道路を走るドライバーのよそ見運転ともなると、これは看過できない「走馬看花」です。



「走バ看花」が現代の四字熟語

ところで「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」(劉奇夷「代悲白頭翁」より)の花は何だったでしょう。



「年々歳々」花もまた同じからず

桜ではなく、唐の東都洛陽の城東に咲き誇ったのは桃李の花でした。花は年々変わりなく咲くけれど、むかし「紅顔の美少年」だった自分は白頭の翁に変わってしまった、と遠い日に

思いを馳せて「人同じからず」と時の過ぎ行きを省みているのです。もちろん花の下に集う人びとも年々変わっていきますが、日本では春の人事異動や入学・入社式に華やぎのあるあいさつとして引用されています。

実は「花も同じからず」で、いま「花城」洛陽の街中に咲き誇るのは大輪の牡丹です。4月中旬の「牡丹花会」には全土から花見客が訪れています。

文・写真:堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)



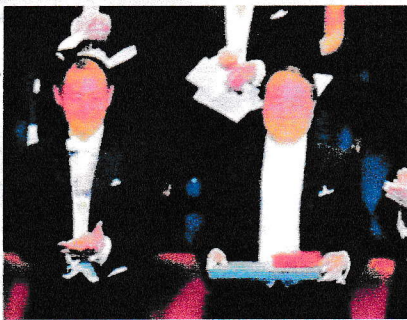
堀内さんと愉しむ四字熟語 第7回

「陽春白雪」ようしゅんはくせつ



文・写真:堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)

四字熟語のなかで、ノーベル文学賞受賞者の莫言氏が用いたこの「陽春白雪」ほどに明るいものは多くありません。2012年のノーベル賞授賞式の会場には莫言氏の隣に山中伸弥教授。日中の名士が並んだ受賞も明るいニュースでした。



莫言氏は恒例のストックホルム大学でのスピーチで、中国文学の現状を問われて「陽春白雪と下里巴人」(楚辞「宋玉対楚王問」から)と説明しましたが、通訳に意味が分からず、自ら「高級な白酒を好む人もいれば普通のを好む人もいる。それぞれ味わいがあるように文化の受容は多様化している」と補足して会場の笑声と掌声を誘っていました。文学者らしく格差ではなく多様性といっています。

「陽春白雪」は高尚な楚の音曲の名で、一方の「下里巴人」(巴蜀のひなびた里人)は通俗な音曲。「下里巴人」は数千人が和して歌うのに対して「陽春白雪」は数十人。自分の作品がどちらにも受け入れられている現状へのとまどいを莫言氏は率直に伝えていたのでしょう。

「三春之暉」(孟郊「游子吟」)は春三カ月の暖かい陽光のこと。長い旅に出る子どもが着る衣服(游子身上の衣)を縫う母の愛をたとえています。これに過ぎる暖かい衣はないでしょう。この詩を口ずさみながら中国の子どもたちは出立を思うのです。父については、李紳の詩「憫農」があります。こちらは日中の強い陽をあびながら畑の土に汗を滴らせて鋤をあつかう父。ひと粒ひと粒はみなその辛苦の成果「粒粒辛苦」であることを思うのです。「游子吟」(三春之暉)も「憫農」(粒粒辛苦)もともに中国の子どもたちがそらんじている詩であり四字熟語です。

春の季語に「山笑う」があって、子規にも「故郷やどちらを見ても山笑う」の句があります。春の訪れを察知して山が動き出す。木々がいっせいに際立ってくると山全体が「春山如笑」(郭熙「山水訓」から)といった姿になり、人の心もおおらかになります。春の「山笑う」から季節は「山滴る」(夏山如滴)へと移ります。

堀内さんと愉しむ四字熟語

第8回

「七月流火」しちがつりゅうか



夏空のアンタレス

文・写真：堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)

●カノープス
冬空のカノープス

夏の星空にかんする四字熟語に「七月流火」があります。盛夏を迎えて激しくなる「炎熱」の意味で用いられていたのですが、本来の意味合いは「向熱」ではなく「転涼」であるとして、誤用を指摘したのは天文関係の人たちだったようです。たしかにこの「火」はさそり座の α 星アンタレスのことで、農曆六月の南天に赤く輝いて「大火星」と呼ばれてきました。七月になると西空に傾いて沈んでゆく姿が「流火」で、『詩経』では「七月流火、九月授衣」とつないで秋涼の訪れを指すのが原義であるということです。

こしはアンタレスに赤い惑星の火星が大接近して、それに土星まで加わって、真夏の天体ショーで賑わいます。都会から離れてお出かけの折りにぜひスカイウォッチングを楽しんでください。

原義はそれとして、夏の生活感に親しい「七月流火」を誤用というなら「八月流火」を使おうというのが「現代漢語」派の意見です。八月には連日40度を超える四大火爐(かまど)都市の重慶市では、消暑法として水上麻雀が「七月流行」になっています。水辺に傘を立てて足元を冷やしながらスポーツとして熱中しています。流れに沿って延々とつづく傘の列は奇観であり涼しげです。



炎熱重慶市の消暑法は水上麻雀

冬の星空の四字熟語といえば「吉星高照」があります。月の現われない「春節」の夜、古人は三つの星を「吉星」(福・禄・寿)と呼んで、これから始まる一年での子宝と豊作と長寿の願いを懸けてきました。

異説はいろいろありますが、冬空に輝く三つの星というのはオリオン座の三星や冬の大三角形ではないようです。全天で最も明るい「狼星」(シリウス)とともに「狼より地に近くに大星があつて、これを南極老人星という。良く見えれば治安、見えないと兵乱」(『史記「天官書」』から)とされています。この全天二番目に明るい「南極老人星」(カノープス、寿老人の化身)に長寿を祈ったようです。日本では地上すれすれに現われるためあまり知られておりません。

堀内さんと愉しむ四字熟語 第9回

疾風勁草

文・写真：堀内 正範（ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長）

夏草が群れているようすを「萃」といい、「拔萃」はそこから抜き出すこと。書物から優れた部分を抜き出すことによく使われています。「出類拔萃」は品格や才能がとくに抜き出すことの例えで、孟子は「その類を出、その萃を抜く」（『孟子「公孫丑章句」』から）といって孔子がとくに秀れている表現としています。

一方、「勁草」はしなやかで勁（つよ）い草のこと。「拔萃」のように平時に知られることはないのですが、猛烈な風が吹き荒れたあとに、吹き飛ばされたりしなかった勁い草が知られるということで「疾風勁草」（『後漢書「王覇伝」』から）がいわれます。困難な事情に遭遇したあとに、しっかりと意志堅固に処していた人が知られることに例えられます。

後漢王朝を築いた劉秀（光武帝）は、兵を率いて黄河を渡って河北に攻め入ったとき、故郷の潁川から従ってきた数十人がみな去ってしまったのに王覇ひとりが残っているのを知ります。そこで「子独り留まる。努力せよ、疾風は勁草を知らしめん」といって励ました。

劉秀はのちに皇帝となり、王覇は北辺を平定して淮陵公に封じられています。ご存じの勁草書房の名はここから。未曾有の嵐だった先の戦争のあと、「信念をもって良書の出版を」との願いをこめて、安倍能成学習院長が命名したものです。

皇帝ともなれば晩年には職務に倦んだりするのですが、劉秀は「日復一日」の勤務を最後まで怠ることなく生涯を終えました。「日また一日」は事業の継続に意を尽くすことにいいです。皇太子の荘が勤勞の過ぎるのを見て「優游自寧」を求めたときにも、「楽しんでいるのだから疲れはしない」といって聞かませんでした。

西暦五七年二月初めに洛陽で六二歳で崩じましたが、直前の正月に東夷の倭奴国王の遣いの奉獻を受けて「漢委奴国王」の金印を贈ってねぎらったのが最後の務めとなりました。日中交流の事績が、「日また一日」をまっとうした劉秀の姿とともに残ったのは歴史の幸運でした。



文劉秀は最後に会った「漢委奴國王」の遣いに金印を賜った（国宝）



堀内さんと愉しむ四字熟語 第10回

「鵬程万里」(ほうていばんり)



文・写真:堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)

来る酉(とり)年にちなむ四字熟語をとりあげておきましょう。

はじめは「精衛填海」(せいえいてんかい)です。伝説時代の炎帝の末娘ジョア(女娃)は、東海で遊んでいて溺死したあと鳥に化身して、ひたすら西山から小石や小枝をくわえてきては海を填めようしました。先人はどうしてこんな作業をする哀切な女性を生み出したのでしょうか。その鳴き声から「精衛」と呼ばれ、「精衛填海」(『山海経』『北山経』)からは堅い意志をもって作業をつづけることにいわれます。魯迅は「題三義塔」で、精禽(精衛)が石を銜(くわ)えて東海を填めつづけるように、中日両国民が怒めて溝を填めていくことに例えています。



次は「鴛鴦」(オシドリ)にちなむ「乱点鴛鴦」(らんてんえんおう)です。「おしどり(愛し鳥)夫婦」といえば仲のいいご夫婦のこと。ところが夜草陰で相手を取り替えて、昼間はむつまじいというのが実見者の話です。人の世にも夫婦を交換する例があつて、人生模様としておもしろいことから、中国では演劇化された馮夢龍「喬太守乱点鴛鴦譜」などが話題になって、「乱点鴛鴦」はよく知られています。わが国では鳥取県の鳥や50円切手で親しいですが、飼育係も認める生態で、「おしどり夫婦」には聞かせたくない本当の話です。

もうひとつ「鵬程万里」(ほうていばんり)を。鵬は伝説に現れる地上最大の鳥。鵬程は飛びゆく先の遥かなこと。そこで「鵬程万里」は前途の遠大なことにいいます。

『莊子』の巻頭「逍遙遊篇」には、北冥(北のはての暗い海)にすむ大魚の鯢(こん)が化して大鳥となり、この鵬が奮い立って飛び立ち、九万里ともいわれる天空を飛翔して南冥(天池)にいたると記されています。実社会に飛び立つ卒業生の前途を祝して用いられています。みなさんの前途にも大きな進展があることに期待して。

